

【ねがいはましては】

KYOWA SCHOOL

第375号

「世界観」

右だけだと右が分からなくなる。左だけでも左が分からなくなる。比べる相手がいてはじめて「あー、右なんだ」とわかる。赤ばかりだと赤がわからなくなり、白があつてはじめて赤だったんだと分かる。やはり私たちは対比させるものがあって初めてその存在をはっきりさせることができるようです。しかしそのようなことを難しく考えることなく、自然界に生きるものたちは当たり前のように生活しています。

私たちは生きるために様々なものを「あたりまえ」にしながら日常を送っています。その代表的な存在のひとつに「数」があります。「数」は、私たちが生活する上でなくてはならないものになっています。買い物には「数」が必要ですし、「時」にも「数」が必要です。明治期以前の日本の文化の中には、「時の数」を干支（えと）で表現していました。「巳の刻」だとか「辰の刻」など雰囲気がありますよね。良し悪しなども「甲乙平」などと・・・。

1・2・3という数字の世界は、多い少ない、大きい小さいなどという量の感覚と密接につながっています。

子どもたちは「数」を次第に評価と結びつけていきます。その中のトップランナーが「1番」という響きです。運動会の徒競走がその例になります。「1番」と聞こえるとなんか心地の良い気分になります。その反対「ビリ」というものもあります。最上と最低の対比で良いと悪いに結びついていきます。

これ皆、結果しか見ていません。確かに日常の世界では『結果が大切』と、よく言われますが、私はこの表現は教育の中に毒素がかなり含まれているように感じてしまいます。

バスケットボールやバレーボールをする際に背の高い人は当然有利ですし、そうでない方は不利になります。同じがんばり方をしていても結果は誰もが想像されるとおりになりがちです。

教育の現場では、子どもたちがそれぞれのがんばり方で評価されることが理想的だと思っています。子どもたちは大人へと成長する過程で、それぞれの世界観が作られていきます。その最たるものが『個性』です。数による評価が存在することで、その『個性』が歪んだかたちで否定されがちになります。

規定の時間内に終わることができないと、その子は『遅い』と判定され『できない子』と評価されがちになります。実はその子は、幼少時から字を丁寧に書くクセを持っていたのです。数字にしてもゆっくり丁寧、ひらがなもゆっくり丁寧、家庭ではご両親から丁寧は美德だと教えられ、本人もそんなご両親を心から尊敬し今に至っています。その状態で学校という横一列に並ばされる社会へと投げ出されます。当然ご両親もそのことは周知の上です。しかし言い続けます。「字は人柄を映し出すものなんだよ、だから丁寧に書こうね。」結果がどんなものであっても、ご両親は帰ってきたテスト用紙を見ながら「丁寧に書けているね、よかったね。」と褒め称えます。

この事例は極端かもしれませんが、『個性』はしっかり守られています。けっしてご両親は「今」に揃えようとしたりしません。

さて、その他のご両親方はどうなのでしょう。我が子が学校の授業についていけないかもしれないと不安になり、日々スパルタのごとく我が子を叱咤し続けてはいないでしょうか。それは他人と比べてはいないのかもしれませんが、今の学校制度を『正』としてとっていることだということをお気づきになってください。

第2次世界大戦が終了するまでの教科書と、修了後の教科書はガラッと内容が変化しました。子どもたちにとっては何が良くて何が悪いのか、分かったものではありませんでした。そのような中、現在でも力強く生活されている戦中をご存じの方々には思ったはずです。『ものごとの善し悪しは、自らが決めること』だと。

最近来られた生徒さんは、自らを「ひよっとしたら、自分は落ちこぼれなのかもしれない」と信じ切っていました。その子は中学2年生、しかし都内の私立中学校へ通われていることで、2年生ながらすでに高校数学を行っていました。その高校分野が分からなくなってしまったことで、「落ちこぼれかもしれない」と、感じ取ってしまったのです。地元の中学校で生活されていたとしたらどうでしょうか。

子どもたちも含め、私たちは非常に狭い世界観を持ちながら生活しているのだと痛感させられました。私も「ハッ」とさせられました。と同時に、自らの生き方を他との比較にしないよう改めて思い直させられました。

今ここでは、学びに楽しく向かう『こころ』を育んでいこうと取り組む子どもたちがいます。

ある卒業生からひとりの偉人を教えられました。鴨長明（かものちょうめい）さんです。高校教科書などで取り上げられるケースが多いそうです。日本の中世期、ひとりの男性が将来の出世を約束させられながらも、数々の裏切りを受け、その名誉から遠ざかり、ひっそりと3メートル四方の家で生活しながらエッセイを書き上げました。『方丈記』です。それから約800年経ちながら、内容は現代の日本の惨状をずばり言い当てています。人の性は何も変わらず、ただ繰り返すのみ・・・。ある日の授業で私は子どもたちにクイズを出しました。「この地球上で一番醜い生物がいます。それは何という生き物でしょう。」「こたえは、『人間』です。お互いに殺し合う生物は唯一『ひと』だけ。」

戦争が早く終わりますように・・・。そんなわたしも、あなたも『ひと』なのです。